

明治中後期立山温泉の社会経済史的研究

温泉関連史料及び新聞史料の検討を中心に

富澤一弘・若林秀行

Socio-Economic Historical Research of Tateyama Hot Spring during the Middle-Late Meiji Period

Kazuhiro TOMIZAWA・Hideyuki WAKABAYASHI

Summary

Meiji era was the time when transportation and many other infrastructures started being organized, and that influenced the management of hot spring deeply.

Although during the early modern times, the hot spring was aimed to be utilized by the peasants of neighboring area, the development of transportation service made it possible for people to travel in short period of time, which resulted in the increasing the usage of hot springs amongst city inhabitants.

However, only those hot springs, which corresponded to city inhabitants's needs such as frequency of transportation, completeness of facility and service experienced a large development, where those hot springs which could not provide experienced a big lost.

The hot spring areas in Toyama prefecture during the Meiji era, developed their transportation and facility services which resulted to a good success.

Yet, Tateyama hot spring never reached the development, and had to sell their right of administration to hot spring in Meiji 30. This report searches the core reasons of why the Fukami Family had to let go their right, by looking through their operational record back in Meiji 20.

Tateyama hot spring during Meiji era accommodated average of 1,500 people per year, and the numbers were increasing slowly compared to the early modern times. However,

the classes of users were mainly inhabitants of farm villages from neighbored areas, which was similar to the classes of users back in early modern times.

Moreover, although the unique geographical condition of Tateyama mountain attracted more mountain climbers, the path to the hot springs were steep, and because of the amount of snow they got every winter decreased customers, which resulted in them closing down their hot springs during the winter season.

Tateyama hot springs, during the operation of the Fukami Family, never resolved the problems they carried, which resulted in only bringing customers who still continued to come, which means they only attracted customers from early modern times on, by Meiji 30, they had to give up their operational rights.

序 論

明治時代は交通機関を始めとする様々な社会資本が整備された時代であり、それらは温泉の経営にも重大な影響を与えている。

近世の温泉は周辺地域の農民を主要な利用者としていたが、明治期には交通機関の整備により短時間で温泉と都市の間を行き来することが可能となり、都市住民の温泉利用が増加するようになった。

しかし、多少交通の便や温泉及び宿泊施設に難点があっても近世以来温泉を利用し続けてきた農村の住民とは異なり、交通網の整備により温泉地を訪れるようになった都市の住民は、より交通の便が良く、より施設が充実しており、より良いサービスが提供可能な温泉地を選択したため、彼らの需要にうまく対応できた温泉地は多くの入浴客を集め大発展したが、それが出来なかった温泉地は発展を遂げることが出来なかった。

こうした点から、明治時代の温泉は2種類の発展を遂げるようになった。ひとつは時代に適合して発展を遂げた観光・娯楽的性格の強い温泉、そしてもうひとつはそれに失敗した、或いは資金面などの原因からそれが出来なかった、療養・保養性格の強い温泉である。

東京近郊の大温泉地、例えば群馬県の伊香保温泉は前者の温泉に分類できる。こうした温泉は、鉄道網の整備をきっかけに都市部の住民の避暑等に利用されるようになり大発展を遂げている。^(註1)

そして後者の温泉は、病気療養や保養などに利用されるために長期滞在が前提となり、交通網の整備が遅れた、或いは特殊な地理的条件から温泉を利用するのは、徒歩で向かう事が可能な近隣地域の住民に止まり、多くの場合その客層は近世のものと同様に農村の住民であった。

元々温泉地は、療養・保養地的な性質を持っており、観光・娯楽地化した温泉地も、こうした目的で温泉を利用する長期滞在の客向けの宿舎を準備していたが、かかる温泉は、都市住民という新

たな客層を開拓するために、施設を改良し、交通網の発展と結びつく事で大発展を遂げている。しかしそれが出来なかった温泉地の中には、その経営権を売却する場合さえあった。

明治初年の富山県における温泉地は、殆どが後者の農村住民に利用される療養・保養的な性格の温泉であった。しかし日清戦争を契機とする好景気の中で、資金力を持った温泉は、道路を整備して人力車の通行を可能にし、さらに温泉の施設を改良して各種サービスを提供可能とするなど、新たな客層を開拓し、明治後年には大きく発展している。

しかし、立山温泉は様々な理由から発展を遂げることが出来ず、明治30年に温泉の経営権を売却している。本論は深見家が温泉経営権を売却する直前である明治20年代の温泉経営の記録を分析することで、その原因を探ることを目的としている。

第1章 富山県内の温泉の発展

本章では明治後半に富山県内最大の温泉となり、大正期には北陸を代表する温泉地となった小川温泉（現下新川郡朝日町湯ノ瀬）山田温泉（現富山市山田）を中心に明治期の富山県の温泉の発展について検討する。

明治20年代前半の小川温泉は、富山県内の温泉場の殆どがそうであったように、近世以来の客層、即ち農村の人々を中心に利用されており、彼らは基本的に自炊を行い、農閑期に1週間前後の期間温泉場に滞在して農作業の疲れを癒していた。こうした状況が変化するのは明治20年代中期以降のことである。^(註2)

明治24年に富山市近郊の温泉、山田温泉は富山市内からの入浴客の便宜を図るために道路を人力車が通行可能となるように改修し、それにあわせて高級宿泊施設「玄猿楼」を3千円の資金を投入して建設し、多くの入浴客を集めている。^(註3)

また小川温泉では、明治20年代中期以降に徐々に都市部の住民による利用が増加していたことを背景に、明治28年から増加する入浴客の便宜を図るために、設備の充実や道路の改修などを開始し、1万円の費用を投じて客舎「不老閣」を建設している。^(註4)

この「玄猿楼」「不老閣」は温泉側が料理を出すという今日の温泉割烹旅館的なものであり、それまでの自炊中心の湯治客ではない人々を対象としている施設であった。^(註5)

こうして高級化を図ることで、都市住民という新たな客層を開拓した両温泉地は大発展を遂げ、特に小川温泉は明治30年代後半の新聞紙上で「富山県内最大の温泉地」と表現され、掲載される記事の量も増加している。^(註6)

その後小川温泉は、大正元年7月に発生した小川の洪水により施設が全て流失し壊滅的な打撃を受けたものの、大正2年に泊町横尾（現富山県下新川郡朝日町横尾）に施設を再建し、大正3年には営業を再開し、同時期に富山 - 直江津間が建設され全線開通した北陸線と結びついて更なる発展を遂げ、新聞紙上で福井県の芦原温泉、石川県の山中温泉、山代温泉、片山津温泉、粟津温泉、和

倉温泉とともに「北陸七大温泉」のひとつに数えられるまでになっている。

第2章 立山温泉の概要

第1節 明治以前の立山温泉経営

立山温泉（現富山県富山市）は古くは立山下温泉・多枝原温泉と呼ばれ、山田、大牧、小川温泉とともに、越中四名湯に数えられており、天正12年に佐々成政が佐良越えの際に入湯したとされている。入湯可能な期間は、4月中旬から9月中旬ごろまでで、打傷・中風・筋肉痛・癩病など諸病に効能があるとされた。温泉は古くから岩嶺寺衆徒によって発見されており、彼らの手によって安永年間に開湯され、金沢藩の郡奉行に運上銀が納入されていた^(註7)。

温泉新道が開削される以前、立山温泉に入湯するには弥陀ヶ原から松尾峠を下って温泉へ下る道（以下温泉古道）を通行するしかなかった。しかし松尾峠は「極難所」といわれるほどに険しい場所その通行は困難を極め、そのために計画されたのが温泉新道開削である^(註8)。

この新道計画は、文化11年春に、町新庄村（現富山県富山市）の亀屋文次郎が立山温泉に通じる新道の開削を、金沢表産物役所に提案し許可されたものであるが、この新道の建設予定地が、立山の宗教集落芦嶺寺の常願寺川を挟んだ対岸であり、新道が完成することで芦嶺寺を通行することなく、新道から立山温泉へ行き、そこから温泉古道を通行して立山に登ることが可能となることから、「温泉方一件」と呼ばれる争論に発展している。^(註9)

この争論は最終的には温泉古道を断ち切ることで解決しており、立山温泉新道は文化11年に建設され大正初期まで利用されていくこととなった。この新道建設を担当し、その後の立山温泉経営で重要な役割を果たしたのが深見六郎右衛門である。

深見家は伝承によれば、その系譜を平安時代の院政期まで辿ることが出来る。その綜祖は白河天皇の妃、賢子の流れを汲む藤原行安とされ、その子孫である藤原内匠が村上源氏の血統として木曾義仲の軍に従軍し、深見兵庫の姓と名前を与えられたのが深見姓の始まりであるとされている。深見家系譜には「金沢深見兵庫八郎兵衛秀豊の弟、天文十五年に百姓に相成り居仕候」とあり、この人物が利田村深見家の初代に当たる深見与四右衛門である。この与四右衛門から5代目の六左衛門までの時期は深見家にとって家力の充実に励んだ時期であり、6代目六郎右衛門の時期にはかなりの蓄財が出来ていたようである。その後6代目から10代目までの深見家は村肝煎の役職を代々勤め、さらにその他の役職を藩から拝命し、以前にも増して繁栄している。^(註10)

温泉新道完成後、亀屋文次郎が温泉経営者である湯元となり、それまでの管理者岩嶺寺には湯元から年1貫目の潤色銀が支払われることになった。その後文政6年には新道を開削した六郎右衛門が湯元になり、これ以後立山温泉は代々深見家によって経営されていくことになった。^(註11)

亀屋文次郎経営下の文化11年から文政5年まで、そして深見六郎右衛門の手に温泉経営権が移ったからの文政6年から天保3年までの時期の立山温泉には年間1千人以上の入浴客が訪れており、

その経営は比較的安定していたが、天保4年以降、飢饉の影響を受け立山温泉の入浴客は大きく減少している。しかし立山温泉湯元は金沢藩から、岩峯寺への銀1貫目の潤色銀と藩への運上銀の支払いを義務付けられており、これ以降六郎右衛門は自らの収入の無いまま温泉経営を続けていくこととなる。天保4年から弘化3年まで14年間の間、立山温泉経営の記録である「立山下温泉運上銀并歩持人之潤色銀留帳」には立山温泉湯元の収入が記録されておらず、六郎右衛門は収入が無いにもかかわらず立山温泉を経営していたことがわかる。

また弘化3年には、飢饉によって困窮した有峰村住民を救済するために、これまで岩峯寺衆徒に渡されていた潤色銀1貫目のうち300匁を有峰村の支援にまわすことになっている。こうして弘化3年からは立山温泉の収入の内、700匁を岩峯寺に、300匁を有峰村に十村の新堀村兵三郎を経由して渡すことになっており、また全体としてみても湯元の収入が銀1貫目以上であった年は文化11年のみであり、この立山温泉の経営が営利目的のみであったとは考えにくい。これらの事例からも立山温泉の経営が単純に利益を追求するものではなく、社会福祉的な側面を持つものであったことがわかる。

その後立山温泉は安政5年の大地震とそれに伴う大鷲山の崩壊によって壊滅し、明治元年に深見家の13代目深見六郎は金沢藩から温泉再興を許可され、明治2年から作業を開始し立山温泉を復興している。

第2節 明治中後期の立山温泉

明治期の立山温泉は、県内最大の観光地である立山山中にあるという立地条件の良さと、近世以来の長い伝統を持っており、さらに高い効能を持っていたことから、富山県を代表する温泉地として年間1,500名を越える入浴客が存在し、何度も新聞紙上に登場している。

しかしながら立山温泉は立山登山を目的とした客を入浴させることが出来た反面、深山であることから、冬季には深い雪に閉ざされ、温泉場に通じる道路も険阻なものにならざるを得なかった。

こうした主に地理的な原因により立山温泉は明治20年代中盤以降、山田温泉や小川温泉等と同様の発展の道筋を辿ることが出来ず、更に度々洪水が発生して道路が崩壊し深見家は維持費を負担しなければならなくなり、明治30年に立山温泉経営権は杉田八郎右衛門に移ることとなった。

こうして立山温泉の経営者となった杉田八郎右衛門は、明治39年から立山温泉周辺の崩壊地に施されることになった富山県営砂防事業^(註12)に積極的に協力し、立山温泉地内に砂防事務所を設置することで、工事資材運搬のための温泉の通路の改良や、工事現場の労働者への物品販売の利益などを得て立山温泉を発展させている。

第3章 立山温泉宿帳の分析

第1節 立山温泉宿帳について

本章では、明治期の立山温泉経営の実態を検討するために「立山温泉宿帳」を利用する。この宿帳は、立山町郷土資料館所蔵の明治23年、明治25年、明治27年、明治28年の4冊と立山博物館所蔵の明治26年のものが1冊、合計5冊現存している。^(註13)

本研究に当たり、深見家の子孫である深見英司氏、立山博物館及び立山町郷土資料館の職員の方々のご協力により、現存している5冊の立山温泉の宿帳の写真を撮影させていただくことが出来た。本稿に於いてはこれらの5冊の宿帳のうち、立山町郷土資料館所蔵の4冊の宿帳を利用することとする。

これらの宿帳は、立山温泉に宿泊した入浴客の情報を立山温泉関係者が記録したものと考えられ、立山温泉に宿泊した人の名前、年齢、職業、住所、前日宿泊地、行先地、温泉への到着時間、温泉からの出発時間が記載されている。^(註14)本稿ではこれらのデータを使用して表及びグラフを作成し、明治20年代の立山温泉入浴客を様々な角度から分析する。

第2節 4箇年の宿帳の記録

立山温泉宿泊者の年齢層

グラフ1は立山温泉宿帳に記載されている温泉宿泊者の年齢を分類したものである。

立山温泉の宿泊者の年齢層で最も多いのは20代前半の人々であり、それに20代後半、30代前半と続いている。明治期の富山県内の人口構成は所謂ピラミッド型になっており、年齢が下になればなるほど人数が増えていくことになるが、立山温泉の宿泊客に関して言えば10代より20代が多くなっている。

これは、第一に立山温泉への険しい道をこうした低年齢層の人々が通行する事は困難であり、第二に立山温泉の入浴客の中心は農村住民であり、彼らは農作業の疲れを癒すために農閑期に温泉を利用しているので、立山温泉利用者も農作業の中心となっている人々であると考えられ、こうしたことを反映して、立山温泉を訪れる10代前半の人々は少ないものと考えられる。

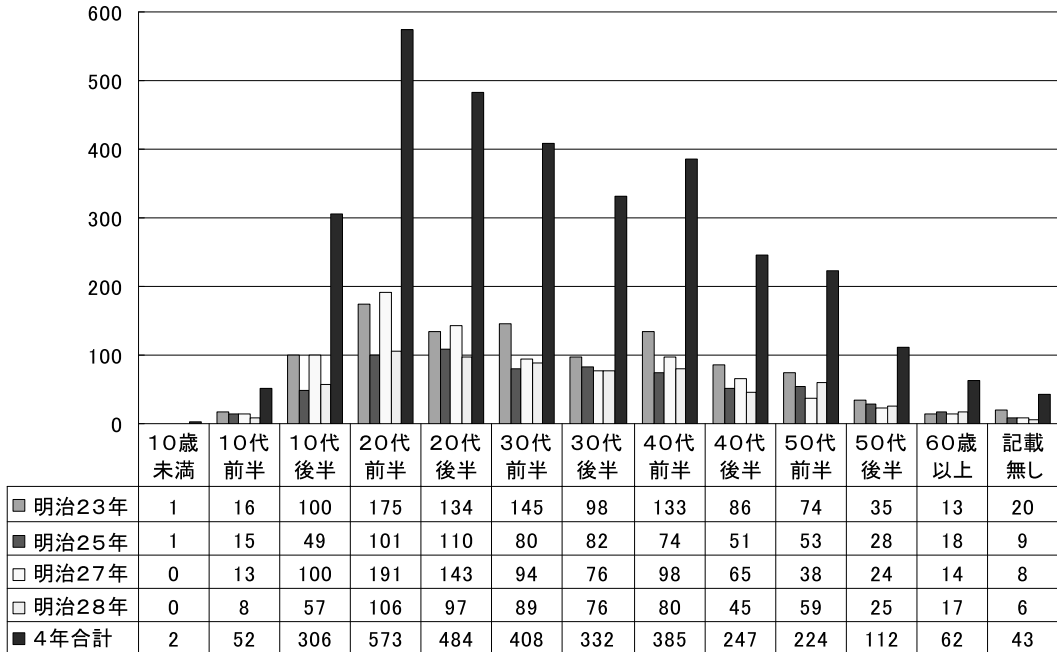
立山温泉宿泊客の職業

グラフ2は宿帳記載の温泉宿泊者の職業の割合に関するものである。

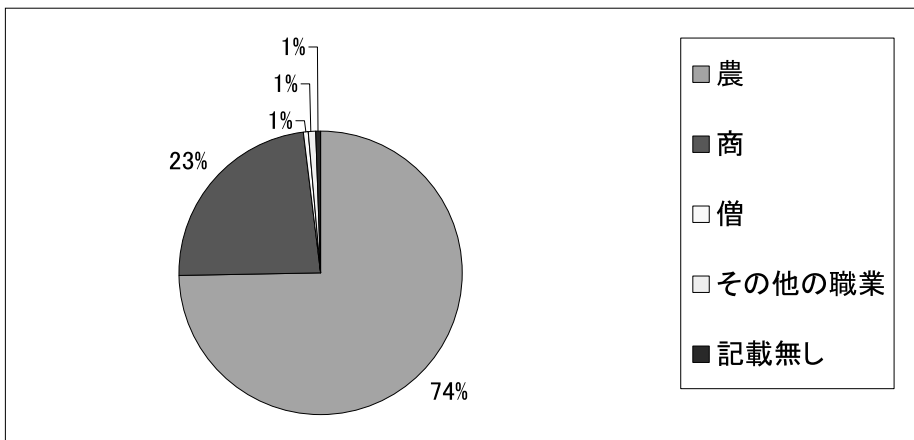
立山温泉宿泊客の職業で最も多いのは農民で、4年間の宿泊客の内の農民の占める割合は74%、その人数は2,416人であり立山温泉の主要な利用者は農民であったということが可能である。これに次いで商人が全体に占める割合が23%、人数は747人で、農民と商人で全体の97%を占めている。

なおグラフ及び表中で「農」とここで表現されている人々は農民であり、「商」と表現されている人々はその記載されている住所が富山市、高岡市などの都市部に集中しており、都市部の商家の

グラフ1 4箇年の宿泊者の年齢層



グラフ2 4箇年の宿泊者の職業の割合



人々であるものと考えられる。こうした事から当時の立山温泉にも所謂都市住民の入浴が若干ながらもあったことがわかる。

これ以外の職業としては、毎年7月25日に行われる立山の山開きの式典に奉幣使として参加した富山県庁の職員、僧、軍人、教員などがあるが、全体に占める割合は無視できるほどに少数である。

立山温泉宿泊者の住所の分布状況

グラフ3は明治23年の温泉宿泊者の住所の分布状況を現したものである。(註15)

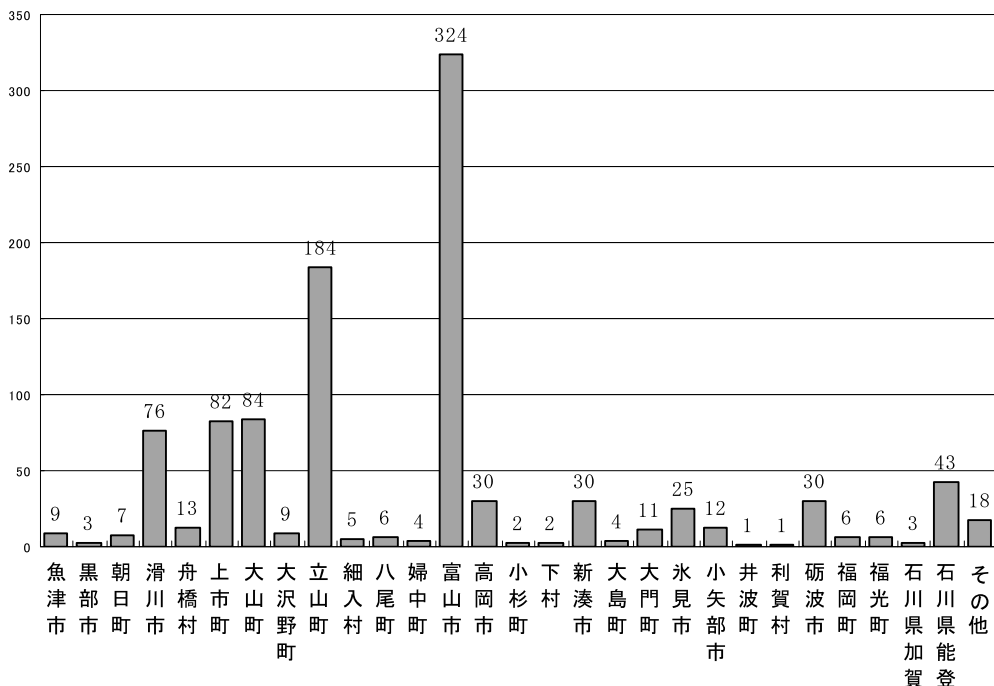
宿泊者の住所を見ると、富山市からの入浴客が最も多く、これに立山町、上市町、大山町が続いており、立山温泉は旧上新川郡(註16)を中心とした地域の住民に最も多く利用されていた温泉であったことが分かる。この旧上新川郡には大沢野町も含まれているが、年間10名以上の宿泊者が訪れたことは無い。大沢野町は距離的には富山市中心部よりも立山温泉に近く交通の便が悪いわけではないが、近隣に山田温泉、高熊鉱泉(山吹鉱泉、現婦負郡八尾町高熊)等の温泉地があり、人々は立山温泉ではなくこちらの方を利用していたのではないだろうか。

また魚津市、黒部市、朝日町など下新川地方(註17)からの入浴客が少ないのは、下新川郡には当時富山県下最大の温泉地であった小川温泉があり、また黒部川流域に多数の温泉地があるためであろう。

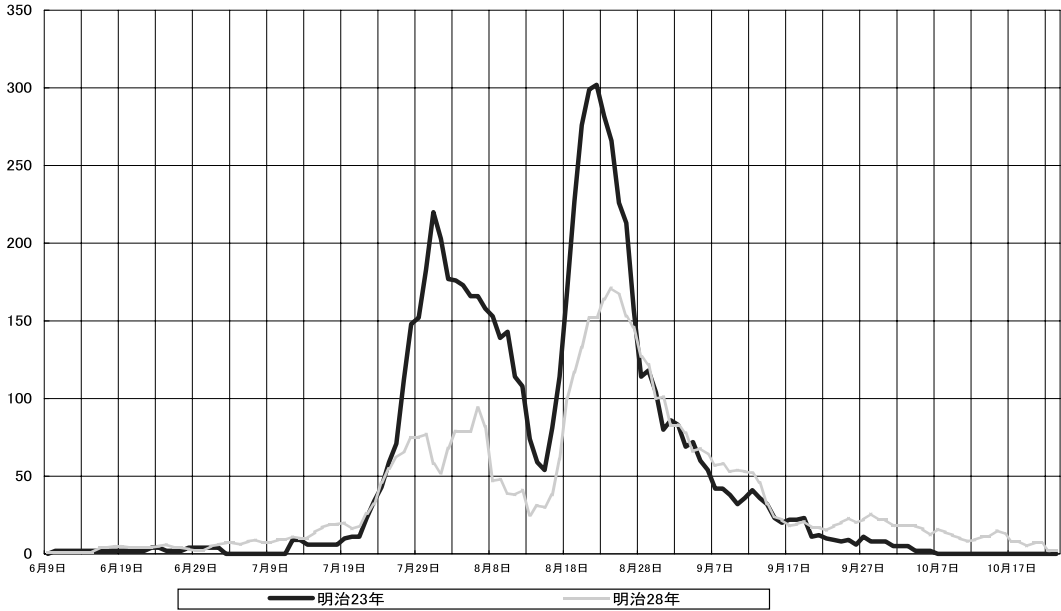
また射水地方(註18)、旧砺波郡(註19)からの入浴客も少ないが、これらの地域から立山温泉までは日帰りで到達することは不可能な程に距離が離れており、立山山中の立山温泉に行くよりも石川県の温泉地へ向かったほうが便利であったためであろう。

温泉地への距離という点で考えると、富山市近辺の人々は婦負郡の山田温泉へ向かったほうが便利であり、実際山田温泉には明治時代初期には年間2万人と立山温泉の10倍近い人々が訪れており、このように交通の便という側面を無視して立山温泉を訪れる人々には、これを差し引いても立山温泉を利用するほどの利点があったものと考えられる。

グラフ3 明治23年宿泊者の住所の分布状況



グラフ4 明治23年、28年の宿泊者の宿泊日数



温泉宿泊客の推移

グラフ4は明治23年、28年の立山温泉を訪れた温泉宿泊者の宿泊日数を集計したもので、宿泊客の推移を表したものである。

本論で利用した4冊の宿帳はその記録されている期間が一定ではないが、その宿泊客の動向に関してはある程度の規則性が見られる。

立山温泉は通常6月5日に冬期休業期間から営業を再開している。温泉宿帳を見ると、立山温泉には6月10日前後には最初の宿泊客が訪れている。

しかし6月中の宿泊客はそれ程多くは無く、温泉入浴客が増加し始めるのは、毎年立山の山開きの式典が行われる7月25日頃である。その後8月に入り10日を過ぎる辺りから新たに立山温泉を訪れる宿泊客は一旦減少するが、15日を過ぎる頃から再び増加し20日前後に年間で最大の宿泊客が温泉を訪れその後減少して行くことになる。

その後その年の内は、宿泊客は増加することはないが、最後の宿泊客が訪れる時期は宿帳の現存している4年間で一定しており、日清戦争やコレラ流行のあった影響で10月まで入浴客がいた明治28年を例外とすれば、9月下旬頃まで宿泊客が存在している。

グラフ2のように当時立山温泉を最も多く利用していた社会階層は農民であった。こうしたことから温泉宿泊客の推移も農作業と密接な関係もっており、それが上記のような形に表れているものと考えられる。

また表1は立山温泉宿泊者の平均滞在日数を集計したものであり、これによれば4箇年の平均宿泊日数は約7日になっており、これは当時の立山温泉の入浴料が、近世以来の一週間単位での課金

表1 立山温泉宿泊者の平均宿泊日数

	平均宿泊日数(日)
明治23年	7.03
明治25年	6.68
明治27年	7.33
明治28年	7.64
4年間	7.17

表2 立山温泉宿泊者の男女別人数

	男	女	全体
明治23年	971	60	1,031
明治25年	634	37	671
明治27年	841	23	864
明治28年	628	37	665
4年間合計	3,074	157	3,231

という形をとっていたことによるものであると考えられる。

男女比率の分析

表2は4年間の立山温泉の宿泊者を性別で分類したものである。この男女比率は宿帳記載の温泉宿泊者の氏名から男女の区別を判断して集計したもので、同表を見ると、立山温泉の宿泊者のうち女性の占める割合が極端に少ないことがわかる。

このように女性の割合が極めて少ない原因としては、立山温泉へ通じる通路の通行が極めて困難であり女性が通行するのは難しいことや、当時の社会システム上、女性が温泉へ出向くということに抵抗があったことに起因している部分もあるものと思われるが、仮にそうした原因によるものであったとしてもこうした極端な数字が出るのはおかしいものと思われる。

事実、明治35年の小川温泉の入浴者は男性が6,014名、女性が3,585名であり、また明治20年代中盤以降に富山県内の海岸に発達しつつあった海水浴場を訪れていた人々は新聞報道によれば女性の割合が多いといった事例が存在しており、立山温泉宿泊者の割合が極端であることがわかる。^(註20)

この主要な原因としては、立山信仰の影響が考えられる。立山は古来から霊山として信仰の対象となっており、山岳修験の舞台でもあった。そしてこうした場所の多くがそうであったように、女人禁制の山であり、入山しようとした女性が山の神の祟りによって石や木と化してしまったという伝説も残っている。

その後こうした女人禁制は明治5年の太政官布告により廃止となっているが、立山に女性が立ち入ると神罰があるかもしれないという迷信は長期にわたって人々の心の中に残存しており、こうしたことを背景に霊山立山の山中にある立山温泉へ入浴する女性の数は極めて少ないものと推測される。

また時代が進んだ大正8年に、富山女子師範学校の生徒が史上初の女性の団体立山登山を行った際に、芦峯寺の人々がこれに反対し、またこの女子登山団体が登山中に雷雨に遭遇したことを「富山日報」紙が「山神の怒に触れた女学生の登山隊」という表題で「紫電一閃、天地も砕かんばかりの大雷鳴に女学生の団は驚いて悲鳴を揚げ、中に2名は喪神気絶し凄惨を極めたり」という内容の記事にしたという事実から、明治20年代当時の人々が、こうした迷信をより強く信じていたであろうことは容易に推測できる。(註21)

このように明治23年、25年、27年、28年の温泉宿帳の分析を行ったが、4冊の宿帳は宿泊客の記録のある期間がそれぞれ異なり、更にそれぞれの宿泊者数も異なるが、宿帳から読み取れる宿泊者の年齢層、住所の分布状況、職業、年間の宿泊客数の推移などの傾向はほぼ同様であり、近隣地域の農民を中心とした社会階層が夏期を中心とした農閑期に一週間程度利用するという近世以来の温泉入浴客の動向と同様であったことが分かる。

第3節 宿泊先からの分析

ここでは立山温泉宿帳の記録のうち、前日宿泊先と行き先地という項目を利用して分析を行う。これらの項目は、それぞれ前者は立山温泉を訪れる直前に宿泊客が宿泊した場所、後者は温泉から出発して向かった先である。筆者はこれらの項目を集計して表3・4・5を作成した。行き先地という項目は、明治23年と明治25年の宿帳には記載されているものの、明治27年のものには数箇所、28年のものには一切記述がないため、行き先地に関しての記録は明治23年、明治25年のもののみを利用した。

立山温泉入浴者の宿泊先の分類

明治23年と明治25年の立山温泉宿帳の前日宿泊先と行き先地をまとめたものが、表3、表4である。

これらの表は立山温泉宿泊者を前後の宿泊先ごとにわけて分類したもので、例えば明治23年の立山温泉入浴者の宿泊先分類表の一番上の芦峯寺 芦峯寺という部分は、立山温泉に到着する前日に芦峯寺に宿泊し、その後立山温泉を出発して芦峯寺に向かったということを示しており、その横にある人数という項目は、それと同じルートを通して立山温泉を利用した宿泊客の人数を示している。

「自宅」という項目があるが、これは文字通り宿泊客の自宅のことであり、自宅 自宅となっている場合は、自宅から立山温泉に向かいそのまま自宅に戻ったことを示している。当時の立山温泉への交通手段は主に徒歩に限られていることから、自宅から立山温泉へ行くことが出来る地域も限定されており、「自宅」の内訳は立山町、富山市、上市町などを中心とした立山温泉近辺となっている。

またこれらの表に宿泊先として登場している地名は芦峯寺、岩峯寺を始め立山温泉近辺の地名であり、これらの場所には、立山登山客や立山温泉入浴客を対象にした宿泊施設が設置されていたことが予想される。

表3 明治23年の立山温泉入浴者の宿泊先分類表

前日宿泊先	行き先地	人 数
芦峯寺	芦峯寺	83
芦峯寺	岩峯寺	2
芦峯寺	上 滝	135
芦峯寺	自 宅	80
芦峯寺	立 山	1
芦峯寺	千 垣	3
有 峰	立 山	1
岩峯寺	上 滝	21
上 市	自 宅	5
上 滝	芦峯寺	3
上 滝	上 滝	83
上 滝	自 宅	13
上 滝	立 山	1
亀 谷	自 宅	1
自 宅	芦峯寺	9
自 宅	上 滝	8
自 宅	自 宅	531
下 湯	上 滝	2
立 山	上 滝	10
立 山	自 宅	2
千 垣	上 滝	5
千 垣	自 宅	6
富山市	芦峯寺	2
富山市	上 滝	6
富山市	自 宅	2
藤 橋	自 宅	11
不 明	自 宅	1
不 明	不 明	4
松 尾	芦峯寺	2
松 尾	自 宅	2
横 越	自 宅	2

表4 明治25年温泉入浴者の宿泊先分類表

前日宿泊先	行き先地	人 数
芦峯寺	自 宅	15
芦峯寺	芦峯寺	7
芦峯寺	千垣村	10
芦峯寺	本宮村	3
芦峯寺	原 村	10
芦峯寺	上滝村	2
上滝村	上滝村	14
上滝村	自 宅	19
上滝村	原 村	4
上滝村	小見村	1
自 宅	自 宅	258
自 宅	立 山	8
自 宅	千垣村	2
自 宅	原 村	5
自 宅	上滝村	5
自 宅	本宮村	1
立 山	上滝村	28
立 山	原 村	11
立 山	自 宅	26
立 山	千垣村	4
立 山	本宮村	2
富山市	立 山	12
富山市	上滝村	5
原 村	自 宅	28
原 村	上滝村	70
原 村	本宮村	29
原 村	原 村	36
原 村	千垣村	4
原 村	立 山	7
本宮村	本宮村	16
本宮村	上滝村	7
本宮村	自 宅	9
本宮村	黒 部	2
本宮村	原 村	1
松ノ木	上滝村	4
記載無し	記載なし	4

明治23年の宿泊先分類表を見ると、最も多い自宅から立山温泉へ向かった宿泊客を除外して考えると、芦峯寺を何らかの形で宿泊先に選んでいる立山温泉宿泊客が最も多いことが分かる。更に岩峯寺を前日宿泊先にしている温泉宿泊者も21名存在しており、近世に於いて立山信仰の担い手であった両集落が、明治23年になっても立山温泉入浴客に影響を持っていたことが分かる。(註22)

近世期に芦峯寺衆徒は、冬の農閑期にあたる10月ごろから翌年の5月中旬にかけて、諸国の檀那場を回り配札を行なって、檀那場の人々を立山禅定に来るように勧誘し、こうした活動の結果立山を訪れた参拝客を宿泊させて収入を得ていた。そして明治20年代になってもそうした活動は、近世と比較してその規模は縮小したものの継続されており、最終的には昭和初期まで続けられていた。

常願寺川の西岸にある芦峯寺村は、立山温泉への通路の対岸に位置することから、同村に宿泊すると立山温泉への距離は遠くなることになる。そのため、表3・4にあるように芦峯寺を宿泊先に利用している温泉宿泊客は芦峯寺の人々の活動の結果立山を訪れた可能性が高いものと思われる。

明治25年の立山温泉入浴者の宿泊先分類表を見ると、芦峯寺を利用する立山温泉宿泊者が明治23年と比較して減少していることが分かる。同年の立山温泉宿帳は8月10日以降のものしか現存しておらず単純に人数を比較することは出来ないが、明治23年には前日に芦峯寺に宿泊した人が300名以上いたのに対して明治25年には47名になっており数値上は激減している。

これに対して新たに登場したのが、原村(現富山市原)と本宮村(現富山市本宮)である。原村は文化年間に10代目深見六郎右衛門が開削した立山温泉新道の起点となる村であり、立山温泉に最も近い場所にある集落で、さらにその手前にあるのが本宮村であり、立山温泉へ入浴する際に宿泊するには最も便利な地理的条件の場所であるが、明治23年には同所に宿泊した人は1名も記載がなく、明治25年になってから登場していることから、この2年のうちに何らかの宿泊施設が同地に建設され利用されるようになったのであろう。

前日宿泊先からの分析

表5は明治23・25・27・28年の立山温泉宿帳の前日宿泊先を集計して作成したものであり、23年から28年の6年間の立山温泉利用者の温泉へ向かう際に利用した宿泊先の変化を読み取ることが可能である。

前述の通り明治23年の段階では、自宅から立山温泉へ向かった人々を除外すれば最も多く利用されていた宿泊先は芦峯寺であった。しかしこの芦峯寺を前日宿泊先とする宿泊者は年々減少しており、明治23年には304名存在した芦峯寺宿泊者は、明治25年には47名と6分の1以下に減少し、明治27年には2名、明治28年には4名と10名以下まで減少している。

これに対して増加しているのは明治25年から登場した本宮村、原村宿泊者である。両宿泊先を利用している立山温泉宿泊客が明治23年の段階では存在しないことから、両村に宿泊施設が出来たのはそれ以降であるものと推測される。このうち原村の宿泊者は明治25年段階で175名と、同年に自宅から立山温泉に直接向かった人に次いで多く、27年には240名、28年には333名に達し、自宅から

表5 4箇年の立山温泉入浴者の前日宿泊先表

前日宿泊先	明治23年	明治25年	明治27年	明治28年
芦 峯 寺	304	47	2	4
岩 峯 寺	21	0	0	8
上 滝 町	100	40	114	61
自 宅	548	280	365	212
立 山	27	71	33	6
原 村	0	175	240	333
本 宮 村	0	35	108	35
千 垣 村	11	0	0	0
小 見 村	0	0	0	2
亀 谷 村	1	0	0	0
松 ノ 木	0	4	0	0
横 越 村	2	0	0	0
有 峰 村	1	0	0	0
大久保村	0	0	0	1
文 珠 寺	0	0	1	0
上 市 町	5	0	0	0
富 山 市	10	17	1	1
不 明	7	0	0	2
合 計	1,031	669	864	665

の立山温泉宿泊者212名を100名以上、上回っている。

明治20年代はこの様に近世以来の立山信仰の担い手であった芦峯寺、岩峯寺の影響力が後退し、信仰を目的としてではなく、観光を目的とした立山登山が盛んになりつつあった時期であったものと推測される。

第4節 立山温泉の収支状況

次に立山町郷土資料館所蔵の深見家文書のひとつである「立山温泉収支精算書」を利用して深見家経営下の立山温泉を経済的な側面から分析する。

「立山温泉収支精算書」は明治26年から29年までの4年間の立山温泉の収支状況をまとめたものである。明治30年に深見家から杉田家に立山温泉の経営権が売却されており、深見家経営時代の立山温泉の最終段階における収支状況を記録した史料であるといえる。この精算書についてまとめたのが表6である。

この精算書に記載されている4年間で唯一赤字が発生したのは、明治28年のみであり、同年は日清戦争と市街地でのコレラ大流行など入浴客を減少させる原因となる事態が起きた年であり、これを除けばその他の年の収支は全て黒字であった。

しかしながら明治26年と29年を比較すると、4年間という短い期間ながらも入浴客数は確実に減

表6 4箇年の立山温泉収支状況

	湯治人数	総宿泊日数	総収入	総支出	利益
明治26年	2,239人	10,625泊	1,361円80銭6厘	1,085円35銭7厘	276円24銭9厘
明治27年	1,816人	8,817泊	1,215円79銭8厘	1,056円96銭7厘	58円83銭1厘
明治28年	1,265人	7,135泊半	1,048円10銭	1,210円428銭8厘	-162円32銭3厘(損失)
明治29年	1,617人	9,530泊	1,390円70銭4厘	1,276円86銭3厘	113円84銭1厘

少している。

また温泉の収入の伸び以上に温泉の支出が増加しており、この原因としては、日清戦争後の物価の上昇が考えられ、温泉の収入は増加しているにもかかわらず、明治29年の利益は明治26年の半分以下である。

明治後期から大正期にかけて富山県内で最大の温泉場であった小川温泉では、この時期に施設や温泉への通路の改良により、さらに多くの入浴客を集めているが、立山温泉の日清戦争後の好景気下で余り入浴客が増加しない割に支出が増加しているという状況は余りよいものではないと思われる。

第4章 総括と展望

本稿は、「立山温泉宿帳」と「立山温泉収支精算書」という2種類の史料から明治20年代中後期の立山温泉の経営状態を、宿泊客の動向と経済状態というふたつの側面から分析した。

その結果分かったことは、若干の温泉宿泊者の性質の変化はあったものの、その住所・年齢層・社会階層・滞在期間は本報告で分析した期間中は殆ど変化していないということである。

明治期の立山温泉には年間1,500人ほどの入浴客が訪れており、近世と比較して入浴者数は増加してはいるものの、その客層は富山市、立山町、上市町など上新川地方を中心とした近隣地域の農村の住民を主体としたものであり、これは周辺地域の農村の療養・保養施設として機能していた近世の立山温泉の客層と殆ど変わらないものであるといえる。

明治初年であれば近世と同様の客層であって当然であるが、小川温泉、山田温泉の様に富山県下の温泉地の中で明治期において大きく発展したものに関しては、明治20年代中盤から30年代にかけて、多額の資金の投入を行い施設や温泉への通路を改良することで、新たな客層を開拓し大きな発展を遂げる契機としている。

一方の立山温泉は立山山中に存在するという特殊な地理的条件から、富山県内最大の観光地の一つである立山に登山する人々を入浴させることが出来た反面、温泉への通路は険阻なものになり、冬期には積雪のため休業せざるを得ず、更に立山信仰に於ける旧来の迷信が残存していた時代には、その影響から逃れることが出来ず、女性の入浴客が訪れる数が極端に少ないなど、発展を阻害する要因が多数存在していた。

その上、立山温泉周辺は安政5年の大地震により崩壊した大鷲山の土砂が堆積する日本有数の崩

壊地であり、土石流が多発し、温泉施設や温泉への道路が被害を受けており、その維持費用は温泉経営者である深見家の財政を圧迫したものと考えられる。

更に本論文で検討したように、同時期の立山温泉の宿帳や収支精算書を読むと、年々その入浴客は減少している。

深見家経営時代の立山温泉では、こうして積み重なった問題点が解決されることは無く、結果としてこれらの問題に目を閉ざしても、立山温泉に入浴することを望む客層、つまり近世以来の客層のみが立山温泉を利用することとなり、明治30年には、その経営権を手放さざるを得なくなったのであろう。

今後の課題としては、温泉経営権を引き継いだ杉田家による温泉経営の検討が挙げられる。第2章で触れたとおり、杉田八郎右衛門は、砂防工事の工事用の物資の運搬という名目で、それまでの文化12年に開かれたものを原型とする、原村から立山温泉への通路とは異なる、藤橋から常願寺川の右岸に沿った新道路を開くなど、温泉への通路の改良を行っているが、これは立山温泉の入浴客が増加する一大画期となったものと思われる。何故なら近世以来、立山温泉への通路は険阻であることで有名で、それが客層を限定する要因のひとつになっており、さらに多くの場合、交通機関の整備は温泉が発展する転機となっているからである。しかしながら通路が改善されたとはいうものの、立山温泉の地理的な問題は残っており、果たして立山温泉の入浴客がどの程度新道建設の影響を受け、変化したかという点は、今後の検討課題である。

(とみざわ かずひろ・本学経済学部教授 /

わかばやし ひでゆき・本学大学院地域政策研究科博士後期課程)

註釈

註1 伊香保温泉は、明治17年の上野 - 高崎間の鉄道開業を契機に発展を遂げている。

註2 「中越新聞」明治20年10月27日 3面に入浴客は主に農家の人であるとの記載がある。

註3 「北陸政論」明治24年1月29日 3面に拠れば、同年中に3千円の費用を投入して西洋型三層樓の建物を建設する事が決定されている。この建物が、山田温泉の開湯伝説に因んで「玄猿樓」と名付けられた。

註4 「北陸政論」明治28年9月28日 3面に拠れば、この翌年より小川温泉では1万円の資金を投入して貴賓客向けの客舎を建設する事を決定している。これが小川温泉「不老閣」である。

註5 小川・山田温泉は、こうした貴賓客向け客舎と共に従来の自炊客向けの客舎を存続させており、全ての社会階層を対象にした経営戦略を持っていたものと考えられる。

註6 「北陸政論」明治36年1月22日 3面参照。

註7 『角川地名辞典16 富山県』(角川書店、1979年10月)526頁。

註8 『立山信仰と立山曼荼羅』(福江充 岩田書院 1998年4月)34-35頁。

註9 『越中立山古記録』(廣瀬誠・高瀬保 桂書房 1990年4月)223-224頁。

註10 『深見家史料解説報告書』(立山博物館 1993年3月)3-14頁。

註11 『もうひとつの立山信仰 立山信仰と立山温泉』(立山博物館 1992年12月)4-35頁。

註12 富山県営砂防事業は、安政5年に発生した大地震により崩壊した土砂が常願寺川下流部に流出する事を防ぐために行われた事業であり、立山温泉内に事務所が設置された。その後大正11年に発生した水害により、事業は大打撃を受け、昭和元年より県営から内務省の管轄になっている。

註13 立山町郷土資料館にはその他に開披不能なものが1冊所蔵されている。

- 註14 明治25年の立山温泉広告は7月13日より新聞紙上に掲載されており、7月10日前後より開湯したものと推測されるが、同年の宿帳は「第弐号」のみしか現存しておらず、この宿帳に記載されている8月10日以降の入浴者の情報のみしか把握する事は出来なかった。
- 註15 平成17年4月現在、城端町、平村、上平村、利賀村、井波町、井口村、福野町、福光町は合併して南砺市に、砺波市と庄川町は合併して砺波市になっており(平成16年11月1日より)、富山市、大沢野町、大山町、八尾町、婦中町、山田村、細入村が合併して富山市になっている(平成17年4月1日より)。しかしグラフ3及び以下の記述では、合併後の行政区分では温泉宿泊者の分布状況を把握し難いため、合併以前の市町村名を使用した。
- 註16 上新川郡は、明治11年に新川郡が上下に分かれて成立し、その後明治29年に常願寺川を境にして上新川郡は分割され中新川郡と上新川郡に分かれている。ここでいう旧上新川郡とは明治29年以前の同地域の事で、現在の富山市、滑川市、上市町、立山町、大山町、大沢野町、舟橋村を含んだ地域のこと(『角川日本地名大事典16 富山県』角川書店 1979年10月 265頁参照)。なお平成17年4月1日より滑川市、立山町、舟橋村以外は富山市に編入されている。
- 註17 本文中下新川地方は現在の魚津市、黒部市、入善町、朝日町、宇奈月町を含んだ地域のこと(平成17年4月現在)。
- 註18 現在の高岡市(一部は砺波郡)、新湊市、氷見市、大島町、小杉町、大門町、下村を含んだ地域のこと(平成17年4月現在)。
- 註19 砺波郡は明治29年3月に東・西砺波郡に分割されており、本文中の旧砺波郡はこれ以前の同地域のこと、現在の砺波市、小矢部市、福岡町、福光町、福野町、井波町、井口村、庄川町、上平村、城端町、平村、利賀村を含む地域のこと(『角川日本地名大事典16 富山県』角川書店 1979年10月 576-578頁参照)。なお平成16年11月1日より、庄川町は砺波市に編入され、福岡町、福光町、福野町、井波町、井口村、上平村、平村、利賀村、城端町は合併して南砺市となっている。
- 註20 「北陸政論」明治36年1月22日3面(小川温泉の浴客数)、「北陸政論」明治35年9月11日3面(女性の海水浴客)。
- 註21 『立山黒部奥山の歴史と伝承』(廣瀬誠 桂書房 1984年10月)549-556頁参照。
- 註22 明治13年に旧芦峯寺衆徒と旧岩峯寺衆徒により「立山講社」という組織が結成されており、両集落の人々は依然として立山温泉の入浴客に影響力を持っていたものと推測される(「立山講社」については『立山信仰と立山曼荼羅』福江充 岩田書院 1998年4月 279頁-335頁 第10章立山講社の活動を参照)。

【主要参考文献・史料】

文献

- 『富山県史』通史編5 近代上(富山県 1981年)。
『富山県史』史料編6 近代上(富山県 1978年)。
『富山県史』年表(富山県 1987年)。
『富山県史』近代統計図表(富山県 1983年)。
『立山町史』下巻(立山町 1984年2月)。
『山田村史』上(山田村 1984年)。
『山田村史』下(山田村 1981年)。
『朝日町史』歴史編(朝日町 1984年8月)。
『角川日本地名大事典16 富山県』(角川書店 1979年10月)。
『日本歴史地名大系16 富山県の地名』(平凡社 1994年7月)。
『立山信仰と立山曼荼羅 芦峯寺衆徒の勸進活動』(福江充 岩田書院 1998年4月)。
『深見家史料解説報告書』(立山博物館 1993年3月)。
『もうひとつの立山信仰 立山信仰と立山温泉』(立山博物館 1992年12月)。
『深見家史料解説報告書』(立山博物館 1993年3月)。
『越中立山古記録』(廣瀬誠・高瀬保 桂書房 1990年4月)。
『立山黒部奥山の歴史と伝承』(廣瀬誠 桂書房 1984年10月)。

史料

- 『下新川史稿 上巻』(下新川郡役所 1909年/再版 新興出版社 1984年)。
- 『宇奈月温泉由来』(山田胖 1956年)。
- 『黒部峡谷史料』(新興出版社 1990年7月)。
- 『立山案内』(大井信勝 清明堂 1908年)。
- 『立山連峰史料』(新興出版社 1991年7月)。
- 『小川温泉誌』(伊藤祐賢 1904年6月 *富山県立図書館所蔵)。
- 「中越新聞」 富山県立図書館所蔵マイクロフィルム。
- 「北陸公論」 富山県立図書館所蔵マイクロフィルム。
- 「北陸政論」 富山県立図書館所蔵マイクロフィルム。
- 「北陸政報」 富山県立図書館所蔵マイクロフィルム。
- 「立山温泉宿帳」 明治23年(立山町郷土資料館深見家文書)。
- 「立山温泉宿帳」 明治25年第2号(立山町郷土資料館深見家文書)。
- 「立山温泉宿帳」 明治26年(富山県立立山博物館所蔵)。
- 「立山温泉宿帳」 明治27年(立山町郷土資料館深見家文書)。
- 「立山温泉宿帳」 明治28年(立山町郷土資料館深見家文書)。
- 「立山温泉収支精算書」(立山町郷土資料館深見家文書)。